

介護等体験を終了した学生の感想

Aさん

私は今回特別支援学校と社会福祉施設での二つの介護体験を通して、かけがえのない体験をすることができたと、達成感を感じています。私はこれまで障害を持っている人と接したことがなく、実習前は「上手く接することができるだろうか」「どんな支援をしていけばよいのか」と、不安で頭がいっぱいでした。

しかし今では、「充実した感情」「感謝の気持ち」に満ち、「障害に向き合っていく姿勢」のヒントを感じとってくることができたと感じます。

まず、特別支援学校では中等部に配属され、2日間移動の補助を行ったり、排泄の補助(オムツの交換)を行ったり、授業の支援を行ったりしました。私が配属されたクラスでは、言葉の話せない生徒が3人いて、こちらの話が通じているかも分からないような状況でした。授業の内容も関節の柔軟や肢体支持(あぐらをかく練習)など、通常の学校とは内容が異なり、私にとっては初めてのことでありました。

しかし、その中でも、それぞれの生徒たちが自分のレベルに応じた目標を持ちながらイキイキと努力している姿を見て、非常に感動しました。また、その努力をきちんと職員の方たちが補助したり、認めてあげたりする姿勢が見られ、刺激を受けるとともに自然と”こういう存在”になりたいと、憧れを抱きながら活動していました。

前述の通り、言葉が伝わっているのか分かりにくかったのはその通りなのですが、「具合はどう？」というような答えの幅が広い質問よりも、「痛いのか?」「今日元気だね!」といった、うなずくだけで答えられる質問をしてあげた方が答えやすいのだということに、気がつきました。

2日目は、一人の生徒に学校の道案内をしてもらったのですが、「右?」「真っ直ぐ?」と不安に思いながらも信じて進んでいたら、ちゃんと目的地まで着くことができ感動したのを憶えています。また、音楽の時間では、普段は積極性に欠けているという生徒が私たち実習生たちに良いところを見せようと、自分から拳手をして頑張っていた場面では、本当に泣きそうになりました。

そして、社会福祉施設では5日間お世話になり、理学療法や作業療法の観察、入浴支援、運動訓練の補助などを行ってきました。こちらでは、脳卒中や交通事故などにより、後天的に障害を持つことになってしまった人がセンター内の9割を占めていて「もともとできていたことが、今は上手くできない」という利用者の方のもどかしさを目前にして、利用者の方の心への寄り添い方を考えた支援というのが本当に難しかったです。

特に、半身麻痺の人・下半身不随の人は脳などがしっかりしている分、「できるのにやってもらおうとする人」、「難しいのに手を借りたくない人」など、それぞれ気持ちが異なっていて、相手のことを理解してこそ適切な支援を行うことができるのだと感じながら過ごした5日間でした。職員の方が、「障害がある」から「何もできない」ではなく、「障害があっても不便」だからこそ「自分でできる方法を一緒に考えていく」ことが、この仕事には必要だとおっしゃっていて、これからの関わりの中でも生かしていきたいと思いました。

合計で1週間程度介護等体験を行ってきたわけですが、これから教職を目指す上でも、人生をより良く生きていくためにも、この体験は私にとって必要なものだったのではないかなと感じています。生徒であれ障害者であれ、その人個人の「可能性」を摘んでしまわないような接し方をしていきたいと感じました。今回この実習を通じて沢山の大切なことを学んでこられたことを、本当によかったですと感じます。今回の経験を「ただの思い出」にしないように、心にしっかりと留めて今後の学習に生かしていこうと思います。